

写の『諸仏要集経』をはじめ、竺法護訳の仏典が多数発見されていることが、何らかの手がかりとなるかも知れない。

竺法護訳の初期〈無量寿経〉写本が実在する場合、①『大阿』訳出（支謙（二二二—二五三の間）あるいは支婁迦讖（一七八—一八九の間）、②『平等』訳出（帛延（白延）二五六—二五九頃）、③竺法護訳成立（三〇八年）↓写本として流布、④無量寿経として『道安録』に記載（三七四年頃）という経過をたどった結果、竺法護訳は失われ、『大阿』と『平等』のみが「五存」の二訳として残されたことになる。

いずれにしても、旅博所蔵写本の中に、現存最古級の初期〈無量寿経〉写本の存在が確認されたことは疑いなく、今後、当該經典の成立や翻訳の系譜の再構築を促す可能性を秘めている。

〔拙稿「旅順博物館所蔵の浄土教写本について」『国際文化研究』（龍谷大学国際文化学会）一二、二〇〇八、二九—四四頁参照〕

『医心方』と『外台秘要方』

多 田 伊 織

本発表では、佚書『僧深方』の輯佚を通して、大部の医学全書である日本の『医心方』と唐の『外台秘要方』の編纂意図の違いと、同じ『僧深方』が、二書の間ではどう異なるか、そして六朝期、劉宋から南斉の間に活躍したとされる僧侶「僧深」

の手になる『僧深方』が一体いかなる医学書であったかを、考察したい。

丹波康頼『医心方』三十卷（永観二年 九八四年進上）は、現存する日本最古の医学全集である。先行する中国・朝鮮・日本の医学書からの引用で成り立つ本書は、唐・王燾の『外台秘要方』四十卷（天宝十一載 七五二年成立）との類似性が以前より指摘されている。

『医心方』と『外台秘要方』が、すでに散逸した唐代までの古医書の宝庫であることは言うまでもない。『隋書』経籍志に三〇巻と著録される『僧深方』は、藤原佐世『日本国見在書目錄』（寛平九年 八九七年までに成立）にも「方集 廿九 尺僧深撰」として著録されている。『医心方』が重要なのは、北宋の校正医書局による改訂を経ていない、遣唐使将来の原本の系統から引用されている点である。今利用できる最も古い『外台秘要方』でも、校正医書局の改変を受けた、北宋もしくは南宋初まで下がった時代の版本である。

幕府医学館で幕末に半井家本『医心方』模刻が行われた際、『医心方』は単方を中心とすることが注意されていた。『僧深方』輯佚に当たって、同じ症状に対する『外台秘要方』と『医心方』の処方相違を検討しているが、『医心方』所引の『僧深方』は、単純な処方のものを多く選んでいる。これは日本医学の後進性を示すというより、処方単方で、すぐに使える単方を、丹波康頼が選んだ、と考えている。単方をまとめた医書は需要があり、『隋書』経籍志にも、北魏・王頊の『王世榮单方一卷』、隋・許澄『備急单要方三卷』などが見える。ただし、

第11部会

他に代替が効かない一部の特殊な処方については、『医心方』は『僧深方』から長文を引用する。こうした処方には、道教系統の万能薬があり、仏教が中国で拡大した六朝期に、医学の分野で、道・仏の交流が盛んに行われていたことを示唆する。これは当時の僧侶・道士の社会的役割と出身階層を考える上で重要である。

『外台秘要方』を『医心方』が参照したと考えられる個所は、巻四の「治髮令生長方第一」以下美容に関する部分などである。しかし、ここでも、丹波康頼は、『外台秘要方』を引き写すのではなく、同じ薬方に対し『外台秘要方』とは異なった出典を探して、編纂しようとしている。『医心方』が『外台秘要方』を引くのは、五く六カ所（数え方によって異なる）であり、残りは、類似の処方があっても、できるだけ別な原典に当たっている。

『僧深方』など古医書輯佚に際して、「又云」「又方」という記述が問題になるのだが、八重津洋平氏の「故唐律疏議」（滋賀秀三編『中国法制史 基本資料の研究』東京大学出版会）によると、敦煌・トルファンから出土した唐代の律疏では、律文を分割して議論する場合、第二段以下の律文の部分の頭には「又云」の二字を冠する。恐らく、『外台秘要方』や『医心方』の「又云」「又方」も、唐代のこうした書式に倣ったものと考えて良いだろう。

『医心方』は、日本に渡来した唐代までの中国・朝鮮の医学文献を基に、日本の実情に合わせ、庶民から貴族まで、手近な薬草から、高貴薬までを含む、あらゆる階層の患者に対応した

薬方を収める。丹波康頼が目指したのは、医学に精通していなくても、開きさえすれば、治療法が見つかる便利な書物であった。『外台秘要方』が名医のための専門マニュアルであるとすれば、『医心方』はひろく治療を求める人のために開かれたマニュアルである。（本発表は平成二十一年度文部科学省科学研究費の助成によるものの一部である。）

中国における「維摩詰」語釈の変遷

山口 弘江

『維摩経』は中国及び東アジア文化圏に多くの感化を与えたが、特に思想面での影響は鳩摩羅什が弘始八年（四〇六）に訳出した『維摩詰所説経』の登場と、訳者羅什やその高弟達が先駆的に注釈を施したことが大きな契機となっている。その後、南北朝時代から唐代にかけて諸師が競って『維摩経』を講じたが、羅什訳の経題に見える「維摩詰」に対する各師の語義解釈を比較すると、変遷の経過が見られるごとくである。

梵語 Vimalakīrti は経の主人公の名であり、「汚れなく名声の高い者」との意でその人格を示す語である。その音写語である「維摩詰」の語は、既に支謙訳に現われ、羅什も『維摩詰所説経』以外の經典には「毘摩羅詰」が用いたが、翻訳に際しては最終的に梵語により正確な「毘摩羅詰」を経題に用いず、支謙訳以来の伝統を重視してか、「維摩詰」の音写語を採用した。